紹　介

外国のアナキスト．グループ　2

フランスのアナキストたち　II

状況主義者インターナショナル

労働者情報通信

アナキスト革命組織

状況主義者インターナショナル

労働者情報通信

江口　幹

前号に引き続き、江口幹氏の「わがドン・キホーテたち」より、フランスアナキズム運動の状況を抄出した。前回はアナキズムの潮流と概要を再録したが、今回は興味深い二つのグループを取り上げた。（編集部）

状況主義者インターナショナル

私は、状況主義者についてアレクサンドルから適切な説明を受けたい、と考えていたのである。私がそんな風に思いついたのは、先だって会った折、状況主義者の影響が日本にもあると聞いているが、と彼の方から状況主義者について話題にし、思想的に彼らは無視しがたい、といったからだった。私は、日本に状況主義者の影響があるというのは何かの間違いだろう、日本では状況主義者という名前すらほとんど知られていないし、彼らについて日本で最も情報を入手しているのはおそらく僕だろうが、その僕すら、

どうも彼らの正体はつかみがたいのだ、と伝え、しかし、非常に興味のある連中だと思われる節があるので、一度できれば説明してくれないか、と頼んでみたのである。アレクサンドルは気安く承諾した。お前は好きなように俺を利用していいのだ、という風ないい方をした。

状況主義者というものがあり、その組織として状況主義者インターナショナルがあることを、私は一九六六年ごろから知っていた。そのころから、『状況主義者インターナショナル』という機関誌も、不定期的にだが手に入れていた。そして、六八年五月にあたって、このグループが注目すべき影響力を振ったことを知った。特に、六八年五月に思想的な初動を与えたものとして知られる、このグループがストラスブールで六六年に発行した、『経済的、政治的、心理的、性的、特に知的な面から考察した、学生の状況の悲惨について、およびそれを改革するための若干の方策』というパンフレットの存在は著名なもので、各国で相次いで翻訳され、海賊版を含めて三十万部も発行された、と伝え聞いた。どういう連中かな、と関心を抱いたが、とはいえ、状況主義者について手軽に理解することは困難だった。彼らはもともとシュールレアリストの流れを汲む文化批判のグループで、それがやがて政治批判の領域にも発展してきたのだ、といわれているだけに、彼らの文章は一種《錬金術》風のものがあり、素直に理解できるという性質のものではなかった。それに、用語には独特の概念があるようで全体的に理解しなければ短い断片すら十分に理解できない、といった性格も備えていた。しかし私は、このグループが、独自の現代分析の視点を持っていることに注意を惹かれていたし、また生産関係の変革だけでは人間の解放は十分ではないと考えていること、政治革命よりも文化革命——生き方の変革こそ社会変革の中心におかれるべきだ、と主張しているらしいことを漠然と感じとっていて、それは私自身の志向とも重なるだけに、このグループの思想をもっと明確につかみたいという希望を、絶えず持ちつづけていたのだった。

私は、質問を始めることにした。実際にかなり混乱したやりとりをいくらか整理してみるなら、私たちの会話はこんな風だった。

「はっきりわからないのだが、僕にはなぜか状況主義者の思想が非常に重要なものに映る。そこで、もしそうだとすれば、革命思想史の中でどういう意味で重要なんだろう？」

「古典的な革命思想——正統派マルクス主義から見れば、明らかに異端だし、対照的で、およそ対照的だという点で注目されるのだろうな。正統派マルクス主義は、社会変革の出発点として経済的矛盾を考える。そして、経済的、社会的機構の転覆を要求し、それによって人間の解放が可能だ、という風に想定する。状況主義者は、この経済的決定論を真向から否定する。人間を解放し自由な社会を作るには、生産手段の共有化のような下部構造の転換のみでは不十分だ、と見ているわけだ。

そう見るにいたったについては、東の諸国の実態が大きな教訓を与えている。スターリン主義やポーランドやハンガリーの事件、あの不幸な諸事件は、単に政治の頂点にいた特定の人間のせいなのか、実はそうではなくて、聖化されていた革命思想そのものを徹底して批判する必要があるのではないか、という視点が、東の諸国の実態を見てゆくことで登場する。そこから、下部構造の転

換だけではなく、もっと全的な変革が必要だ、という思想がでてきた。

この思想の背景にはまた、現代には現代に特有の新しい疎外の形態が生まれている、という時代認識もある。生産・消費の様式が進歩するにつれ、技術が社会組織の中に介入するにつれ、つまり搾取と抑圧の組織化が進むにつれて、新しい疎外の形が現われているので、革命を達成するには、現代社会とそれが分泌した疎外の諸形態の分析が不可決だ、という考えだな。そこで、理論的な分析が、経済的要素よりもむしろ日常生活の批判に向けられるわけだ。そこに状況主義者は、単なる下部構造の転換ではない変革の、突破口を見ている」

「現代社会の分析 ――日常生活の批判、か。いくらか状況主義者の文章を見たことがある僕としては、彼らがかなり独特な、しかも徹底した現代社会の分析を行なっているらしい、ということはわかる。しかし、必ずしもよくわかるとはいえないし、彼らの用語である、スペクタクルとか役とかいうものも、わかるようでわからない点もあるのだが」

「彼らは、人間の基本的な欲求は創造の欲求だ、と見ている。創造によって人間は高められ、そこで初めて人間は、自分と一致した生き方ができる。ところが、現代は人間に対して自分と極端に一致しない日常生活を強いている、と彼らは分析する。

スペクタクルというのは、いうまでもなく舞台と観客とで成立しているが、現代のスペクタクルは、それらがはっきり分離しているのが特徴だ。観客は、単に見ているだけ、与えられ、操作されるだけだ。そういう分離、自分自身との間に何物かが介在し、何物かから一方的に与えられ、何物かに操作されている、そういう自分自身と一致しない生活が普通化した社会、それを彼らは≪スペクタクルの社会≫と呼んでいるわけだ。

それは商品の並外れた生産によって特徴づけられる社会、消費経済の社会、経済のみがますます優先化されつつある世界だ。増大する富は、質的なものとは無関係で、単なる生存にしか役立たない。交換の極端な量化が人間を物にし、日常生活を凡庸にしたからだ。空間も時間も資本主義生産によって画一化され、そうして商品交換の合理性がすべてに滲透し、商品が日常生活の全面を占領し、スペクタクルが完成した、というんだな。そこで現代の日常生活は、行動の様式にいたるまで全面的な管理に服している。つまり、人間はいつも何らかの役を演じさせられているにすぎない」

「もっともだけれども、そういう日常生活の分析、批判が、どういう形で革命的なものに転化するんだ？」

「彼らは、日常生活の批判は単に批判にとどまってはいない、と考えている。現代社会は矛盾を増大せざるをえないからだ。今の体制の内的な合理性は、経済の無限の発展を必要とする。消費者の欲求はますます≪作りだされ≫なければならない。個人はますます操作されなければならない。人間はますます自分自身から引き裂かれる。その分離の自覚が、不満を、革命的な情熱を生みだす、と見ているわけだ。状況主義者は、革命の担い手をプロレタリアートと考えているが、プロレタリアートとは、自分の生命を全く活かしえない≪果てしない大多数≫の労働者を指し、プロレタリアートが革命の担い手となりうるのは、最も疎外されていて、

自分たちの疎外についての認識に到達することができるからだ。といっている」

「革命について、主観的な条件を重視していると見ていいのか」

「革命の成就には少数の革命家たちの意志で足りるというブランキ的な意味とは全く違うが、確かにその通りだね。客観的条件のいかなる熟成も革命を勃発させるものではない、と考えられている。主観的条件が革命を可能とする。日常生活の批判が根底的な批判の出発点で、それはまず個人の内部での自覚に始まる、というんだ」

「そこを起点として、どんな革命方式が想定されているんだ？」

「現代資本主義に対する全面的な異議申立てだね。この六八年五月に一般化した戦術は、状況主義者が提起したものといっていい。それは、支配階級によって与えられた空間と時間を根底的に変えようとする、無数の自発的な行為を指す。状況主義者は、全的な人間、つまり自分自身と一致した人間に到達することが革命だ、と考えている。解放された人間は、もはやホモ・ファーベルではなく芸術家、つまり自分自身の行為の創造者でなくてはならない、と考えている。解放された社会では、人間の生活は詩でなくてはならない、と考えているんだ。しかし、経済機構についてのどんなに優れた変革も、詩を成就するものではないので、文化革命―日常生活から出発して社会関係を再構築する行為、全面的な異議申立てが革命の主軸になる、というんだな」

「そこで、従来の形の革命組織も批判されているわけだな？」

「もちろんだ。六八年五月の、状況主義者の労働者へのアッピールは、≪革命組織は、疎外された形の下では疎外とはもはや闘えないことを学ばねばならなかった≫と指摘している。ここでいう≪疎外された形≫は、むろん指導者と大衆との分離という図式を指している。社会主義は、全面的な自治管理、つまり、あらゆる面での、大衆による自分自身の生活の管理を通じて実現される、と見ているんだな。いうまでもなく、この意見は前衛党の思想とは全く対立する」

「革命後の社会について、生活が詩であるような、といっていたが、もう少し具体的にいうとどうなる？」

「個人の自由の実現が集団的な自由の基礎となる世界。集団の何らかの優越は問題にならない。日常生活は、そこでは≪スペクタクルの社会≫とは転倒したものとなる。つまり、人間関係は、何らかの仲介物、何らかの条件づけ、操作にはもはやよらなくなる。個人は、各自が参加し、相互のコミュニケーションを持ち、各自が実現をはかる。創造性、自発性、歓びが支配する。質が尺度となる。すべての人間が芸術家になり、あらゆる活動が創造的なものとなる。つまり、詩が遂に日常生活を統合するわけだ。それは、いわば遊戯の文明社会だ。状況主義者のスローガンの一つは、≪決して働くな≫だった。彼らは、生産労働を秩序維持の有力な手段の一つとしか見ていない。彼らは、≪新しい型の自由な活動≫のために労働は廃止すべきだ、と主張している」

「なるほど」私は箸をおいて考え込んでいた。「ユートピア的だが――」

「いかにもな、ユートピア的だ」

「しかし、面白い、看過ごせないな、非常に魅力的だ」私は、改めて十分に考えてみるつもりだ、といった。アレクサンドルは、

「状況主義者の主著、ドゥボールの『スペクタクルの社会』とヴァネージャンの『若い世代のために』を熟読してみるんだな」といった。

労働者情報通信

私がICOの名を知ったのはそれほど古いことではなく、六八年の秋だった。そのころ私は、六八年五月のことを少し調べ始めていて、資料の一つとして、『労働者情報通信』の別冊五月革命特集、『フランスにおいて全面化したゼネラル・ストライキ』を入手したからである。私は、その中での記述に興味を持ち、以来ICOグループのことを面白い存在だな、と感じていたが、こんどフランスに来て、このグループについて更に多くを知るにつれて、このグループほど旧左翼の批判を徹底し、きわめてユニークな実践をしているグループはないのではないか、と思うようになり、私の関心はいっそう強いものとなっていたのだった。私は、真に大衆を解放するに足る新しい変革への運動の典型は、このグループにあるのではないか、とさえ感じ始めていたのである。

ICOは、理論と実践の両面ですでにかなりの歴史を持つグループだった。この集団は、『社会主義か野蛮か』誌グループの、一九五八年の分裂から誕生しているが、前身である『社会主義か野蛮か』誌グループが、特異な理論的成果をあげている事実は、ICOの今日を理解する上で決して無視できないことであるように思われる。

今から考えれば実に滑稽なことだけれども、かって共産党とソ連は革命を体現する、神聖にして不可侵のものだった。それに批判の矢を向けることは、社会変革そのもの、大衆そのものに背くものとして烙印を押された。しかし、フランスでは、第二次大戦後、その神聖不可侵なものへの批判が徐々に始められ、スターリン批判、ハンガリー事件を経て公然化する。スターリンの個性のみならず、ボリシェヴィズムそのもの、ボリシェヴィキ党に固有の官僚主義にまで批判の眼がそそがれるが、この種の批判を、ソ連社会の大胆な解剖にまで進めて最も徹底させたのが、『社会主義か野蛮か』誌のグループだった。

このグループの特徴は、その当否はともあれ、西の資本主義と東の《社会主義》とを、同時に批判する視点を獲得した、という点にある。その視点によれば、搾取社会であり、資本主義国家であるとされるソ連は、次のようにとらえられている。

A　ソ連において、私的資本主義でも社会主義でもない、第三のカテゴリーが生まれた。つまり、国家資本主義である。この経済的、政治的権力を全面的に集中した体制は、第一次大戦後に始まった、すべての工業化社会に共通する発展の、一つの到達点であり、西の資本主義の理想の明日でもある。というのも、経済・政治権力の集中は、西欧資本主義諸国をも特徴づける現象であるが、それはまだ全面的なものではなく、反対党もない、組合もない、競争相手の資本家もない、という東の実態ほどには搾取の体制が完成されていないからである。

B　ロシア経済、ソビエト社会を特徴づける社会経済関係を綿密に検討してみると、ロシアが資本主義の最後の局面にあることは明らかである。そこでは、技術の進歩が頂点に達し、資

本と権力の集中が極端に進んでいる。官僚階級は、まさしく、資本主義のこの発展段階に呼応する階級であり、その基盤は、一党の手中にある経済的、政治的権力の全面的な集中のうちにある。

C　官僚階級は、工業化の恩恵に浴している新しい階級であり、新しい経済体制と搾取様式の下での、真の支配・搾取階級である。彼らは、資本家たちの野心を実現している。というのも、独占的に、経済的、政治的権力を握っているからである。西欧に比べれば、ロシアの官僚階級は、個人的に生産手段の所有者ではないので、その階級的性格を隠蔽しやすい。しかし彼らは、所有者階級のあらゆる特性を持っている。彼らは、投資を決定し、指導し、価格と賃金を定め、中堅部を任免しているし、西欧においてブルジョアジーの特質である。生活の水準と様式を享受している。しかも彼らは、共有の名目の下に彼らに属している、生産手段と特権をわがものにしている。

D　西欧において、階級的搾取の主な受益者は、所有ブルジョアジーではなく、体制の利益を独占している、産業商業部門の幹部であり、高級官僚である。それは、所有の名目ではなく、生産関係の中での彼らの位置にもとづいている。西欧における彼らに対応するものが、ソ連における官僚階級である。

今日では、真の階級差別は、もはや所有者と非所有者の間にはなく、決定権を持つものと持たないものの間にある。労働者は、単なるロボットの状態に還元され、自分の行動についてのいかなる決定権も持たず、すべての創造的精神を失い、自分の労働の中でのすべての発意を放棄している。それは、東にも西にも共通した状況である。

この『社会主義か野蛮か』誌グループが獲得した認識は、分派であるICOグループにも明らかに継承されている。彼らは、いわゆる社会主義国に何らかの幻想も持たない。そうした実態をもたらしたいわゆる前衛党にも何らかの幻想を持たない。持たないだけではなくて、それらを敵視する。彼らは、労働者の解放が、なにがしかの代行機関の手で可能だ、とは考えていないのである。彼らは、労働者の解放を保証するものとして、労働者自身による企業と社会の管理を目指す。その目標は、彼ら自身による意識の変革と実権の掌握によってしか、達成されない。いかなる外部からの介入も、目的への道を逸脱させるものでしかない。ICOは、労働者の解放は労働者自身の仕事である、という主張を、文字通り厳格に実践しようとする。その実践の徹底した性格が、アナキストを含めた他の政治的諸党派からICOを引離し、独特の存在とする。

ICOは、革命組織を根底的に批判する、あるいは滑稽視する。解放への闘争の中で、何らかの政治的グループが≪役割を演じよう≫とするのは、僭越で有害な行為である。というのも、労働者の意識は何らかの外からの宣伝によって形成されるものではなく、階級闘争の場での経験を通じて、自ら獲得されるものだからである。それに、≪役割を演じよう≫とすることは、その主観的な意図がどうだろうと、現行社会を変化させることがあるとしても、決してそれを解放するものとはならない。というのも、誰かが≪真実である≫、あるいは≪よい≫と考える思想を強制しようとすることは、あらかじめ特定の人間に決定権を留保しようとする、特定の優越者を認める、権威主義的な態度であり、本質的に現行

社会と同じ体質を帯びているからである。労働者解放の諸条件は、誰かが考えた図式に服従することで生まれるのではなく、労働者の利益を労働者たちが追求してゆく過程でこそ、具体的に明らかにされる。これが、階級闘争が労働者自身による社会の管理を目指すものならば、そこには革命組織の場はない、とするＩＣＯの見方である。

ＩＣＯはまた、伝統的な組織をも、手厳しく批判する。組合は、管理の機関であって闘争の機関ではない。それは≪利益の分配者≫でしかなく、現行社会の中で、その保守以外の役割を果してはいないのである。

要するにＩＣＯは、労働者の経済的必要と最低限の安全の保証のための、従来の労働運動を乗り越えようとする。労働者の全的な解放が問題なのであり、搾取と疎外をもたらす体制の廃止を求め、賃労働そのもの、権威そのものを告発する。

ＩＣＯは、労働者の闘争を新しい眼で眺め直す。それによれば、闘争は何よりもまず労働者の自覚と力の獲得の場だった。現行社会の中で、労働者は従属者としての精神傾向を持っている。それが打破されるのは、闘争の過程においてである。そこにＩＣＯは、≪対決≫を持ち込もうとする。彼らが革命の具体的な起点と考えている、労働者を職場で自治的に提携させる委員会の結成を説くとともに、≪対決≫を称揚する。それは、現行秩序からはみだした闘争手段のことであり、具体的には、山猫スト、工場占拠、管理者の監禁などである。それらは、当然のことながら激しい反動を呼び起こす。その≪弁証法的な≫過程で、労働者は、社会の主人であるのに必要なもの、生産や社会機構についての彼らの独自の経験と、意識とを獲得してゆく。そして、このＩＣＯが労働者の闘争に期待する志向は、現にフランス労働運動の新しい潮流―既存の労働組合ではなく、職場闘争委員会といった自治的な組織により、明確に労働者管理を目指し、賃上げよりも人間らしく生きることを問題とし、力で闘う手段をとる、新しい潮流の性格と、基本的には一致するものだった。

ＩＣＯというグループの存在は、そうした闘いの中での労働者たちの相互援助の場（厳密にいえば、場の一つ）である。それぞれの職場を越えた、≪水平的な協同≫の場であり、そこでは、お互いの職場で起きていることを知らせ合い、組合の操作を暴露し合い、共通の要求を討議し、相互に支援し合うのである。しかもこの支援は、労働者たちが≪しようとすることをするよう≫援助するのであり、それは、何らかの組織の一員としてではなく、個人の資格ですることだ、とされているのだった。

たとえばその支援の姿勢に、私はＩＣＯの特異性、労働者自治の徹底した追求を確認する。支援者は、つねに労働者たちの自己決定にしたがって行動するのである。この自発性、自主性の尊重と、そこに変革の起点を見る思想を、ＩＣＯのいたるところに感じて、私は心を動かされる。その基本的な姿勢は、ＩＣＯの雑誌『労働者情報通信』の誌面の上に、やはり最も如実に現われている。このほそぼそと継続されている、しかしすでに一二二号を数える薄い月刊誌が、最も多くのスペースを割いているのは、フランスでの、あるいは諸外国での、労働者の闘争の記録、すなわち、労働者の経験交流のための情報であり、ついで、見られるのが、読者間の、あるいは読者とＩＣＯとの間の通信、つまり何らかの

問題をめぐっての討議である。ここを貫いているのは、何かある結論に誘導しようとする意図ではなく、情報と討議の交換を通じて自主的な決定を待とうとする姿勢だった。しかも、それはきわめて徹底していて、たとえば私たちは、ＩＣＯを批判ないし非難する文書さえ、少なからず彼らの雑誌の中に見ることができるのである。

そういう態度に、私は《疎外されない形での》闘争の基盤の具現化を見る。そして、ＩＣＯは少数者の小さなグループにすぎないけれども、その持つ意義から見れば、実に注目すべき、先駆的なグループだ、と感じているのだった。

ＯＲＡ（アナキスト革命組織）の目的および原則

（一九七三年・グラスゴー会議における修正による）

宮坂英一・訳

ＯＲＡは、特権階級の増大や、人間の人間による搾取を不可能にする社会の設立を追求するものである。それゆえＯＲＡは、自発的な協会に基づく、あらゆる生産・分配手段の共有を出張する。そのような社会をつくりだすために、現在の不正かつ不平等なシステムに不可欠となっている機構 ― 賃金システム・資本の蓄積・貨幣 ――の廃止をめざして進まねばならない。商品は、最大の利益を得るためだけではなく、社会的にも個人的にも、人間にとって必要となるものを充足するために生産されるべきものである。

教育やレジャーのあらゆる施設の利用をつうじて、生活の物質的状況を変えるだけではなく、生活の質をも変化させていくことが必要とされる。

自由社会をめざす一つの手段として、ＯＲＡは、現在の混沌とした暴虐な社会に対してより適切な批判を加え、より有効な抵抗を行なう必要がある。また社会的必需品の私利的所有に反対し、現存システムの利害に基づく競争よりも、われわれ自身の利益に基づく協力を増進させ、借家人協会、市民委員会、消費者グループ、父兄会などの搾取から人々を保護する組織を築き、維持していかねばならない。そうすることによって、特権階級や支配階級によらずに、人民自身を組織可能とする多種多様な手段を展開させていく必要がある。

われわれは、一般大衆からイニシアチブや管理権を奪い、それらを永久官僚、議会「代表」や革命的「指導者」にゆだねてしまうあらゆる活動・組織に反対する。

よりよい生活条件やより豊かな生活獲得のために、われわれの仕事を、日々の闘争に基づかせ、一般大衆の希望と活動を結びつけ、共通の問題、共通の敵についての認識を深める。それは、社会のより満足すべき形態を求めるわれわれの仕事のガイド的役割を演じるであろう。

われわれの組織のとる形態は、現在の状況でのリバターリアン展望の現実化である。それは、自由社会の社会的モデルではなく、

人間性解放の発展との相互作用のなかで発展していくものであると、われわれは認識している。

(a) われわれは会員組織である。

(b) 行動および運営の自治権をもったいくつかのグループで地方分権主義を構成し、その代議員は協力機構以上の機能をもたない。

(c) 代議員はいつでもその委任者によって解任されうる。

(d) われわれは指導権が増大することの危険性を認識しており、意識的に、首尾一貫して、広汎に、関わり合い、責任およびあまり複雑でないリバターリアン展望を刺激するものである。

(e) すべての関係は、相互責任および「各人の必要性に応じて」という金言を反映する。

(f) われわれは前衛論を排する。それは新しい社会にまで権力関係をもたらすものである。

一、労働の場での大衆グループの確立および強化

雇用者およびその利益を代弁するところの国家の共同活動に対して、あらゆる有効的な斗いのための重要な武器としての労働者相互の協力をおしすすめ、無慈悲な敵に対抗しなければならない。

この斗いを実行するため、ORAは、現在永久官僚——かれらの利害や生活様式は一般労働者より管理者の方に近い——の手中にある決定権やコミュニケーションの人民管理を得るため、労働組合民主主義のために闘う。

われわれは独占資本主義の時代にいる。現在の労働組合の官僚政治は、労資間の緩衝および仲介という伝統的な役割から、ますます、労働力の制御を行なうなかで、国家の代理者としての活動を押しつけられてきている。

このような理由によって、非公認ショップフロア組織にみられる労資間の不和解は、賃上げや労働条件の改善のための日々の斗争においてだけではなく、民主的な自己組織の自覚および方法——それらは資本主義の崩壊の前段階であり、社会のあらゆる点での労働者自己管理・リバターリアン共産主義に代わるものである——の発展においてもっとも重要なカギとなる。

ORAは、非公認ショップフロア組織を一般大労働者階級組織と伴に、労働者評議会の前兆として、リバターリアン共産主義社会の経済的・政治的基礎単位としてとらえている。

それゆえわれわれは、一般労働者階級組織を民主化するための戦斗的な斗いは重要なものであると考え、革命的な展開を援助する。これによって、反官僚政治綱領に結びついた、現存する一般大衆グループに参加し、改革するために斗うことは必要である。

ORAは、労働者がより有効にみずからの利益を守り、彼ら自身の利益に基づいて工業を引き継ぎ、管理する方法によって大衆組織網を完成させるべく努力する。

二、借家人協会および地域評議会の確立および強化

よりよき生活環境やその他の社会的事業をめざして地方権力

と斗うだけでなく、みずからの利益に基づいて、その事業をすすめていくのに可能なコミュニティ組織を創りだすことも必要である。

三、工業利益やアカデミック・エリートによる教育管理の排除

ORAは、リバターリアン教育――よくても社会のデ・スクーリング、わるくてもストリーミングの廃止および民主的な決議管理という手段による、教育機関に従事し、働いている人々による各機関の管理のような方法をつうじて、個人の発展を助長するようなシステムへの運動を支持する。

四、あらゆる形の人種的偏見への反対

人種的偏見は人間間の生物学的不均衡からおこったものではなく、搾取の正当化の神話を活用つづけている、植民国家の経済的利害の結果から生じた問題として、われわれはとらえている。人種的偏見の影響、一般の人々を分化させ、かれらの共通の利益の達成を妨げるものである。

五、社会的および急進的運動における女性解放運動への支持

われわれは自立した女性グループの形成を支持する。女性解放斗争は、われわれが提案した革命で終わってしまうものではなく、数世紀続いた状況を打破する教育・活動の一継続過程であろう。人種的偏見と同じように、婦人の低い地位や機会の制限の示すものは、人々が分化されたという一結果である。

革命を成功させるために、差別および搾取のあらゆる形態に対する斗いは、パン粉を得るという防御的な努力から、われわれの社会の完全な管理を獲得するという断手とした斗いに転換されなければならない。われわれは、現存するあらゆる体制は社会主義と呼ばれるべきものではないと、確信している。資本主義体制に代わって、多くの国々で、永久官僚政治による支配体制――イギリス支配階級のような個人財産の個人管理・所有に基づいたものではなく、完全な権力国家の管理によるあらゆる生産物の共同管理に基づいている――を確立した。

われわれにとって唯一、行なわれなければならない革命は、一般大衆がかれらから、かれらに依存している人達を排除し、かれら自身のために一般大衆を組織化していく斗いである。このような理由によって、「アナーキー」は首脳・地方高官、すべてのひとりよがりの官僚たちの恐怖の叫びである。（この言葉は「統治者のない社会」を意味するものである）それゆえ、かれらは「アナーキー」を混沌とみなし、かれらがわれわれにとって不可欠のものであると信じさせようとする。しかし、われわれは有効に広大な都市を組織化し、「アナーキー」をつくり出した経験を有している――一九一七年・ロシアで（共産主義者によって崩壊させられてしまったが）、一九三六～三八年・スペイン（共産主義者とファシストらの不浄な同盟によって崩壊）、一九五六年・ハンガリー（ソビエト「労働者」の戦車によって崩壊）、一九六八年・フランス（あらゆる既成の政党によって引き戻された）。これらのでき事は、一継続過程の一部分にすぎない。スペイン人民は、いまでもフランコ独裁政権を脅かしており、ポーランドの労働者

は、二十年後の同種の抑圧におびえてはいない。そしてブランスでは、一九六八年に提言された理念や希望を抑圧するため、現体制はより強力な警察国になりつつある。

ＯＲＡは国家ミリタリズムに反対する。国家暴力機構の最大の目的は、その人民に対するものであるとわれわれは考える。これは独裁政権において明らかであり、自由主義陣営においても明白な例がいくつか見られる。ウルスターのカソリックが第二階級の市民権を受けることを拒否したとき、かれらはＣＳガスにさらされた。また、住む家のない人たちが、空家を占拠することによって住宅問題を解決しようとしたとき、かれらは脅され、虐待され、投獄させられた。

あらゆる国々の支配者は、われわれの共通の敵である。そしてまた、あらゆる国々の一般大衆はわれわれの同志である。それゆえ、利害のからんだ国々の支配階級の対立によるいかなる戦争にも反対する。

ただ一つの必要とされる武力斗争は、抑圧された人々が暴力によって、搾取者からのがれることが必要であると認識したときのみ求められる。この条件によってブルジョワジーは、革命斗争にまで介入してくるだろう。もちろんかれらは、平和的にその権力をひき渡すことなどしない。自治革命機構を守るための人民の武力斗争は、国家暴力装置によるようなミリタリズムとは異なるものである。

ＯＲＡはインターナショナル主義である。換言すれば、世界の直面している多くの問題――貧困、資源の不足、公害――は、それらに関わるすべての人民によってはじめて直視されるであろうと、われわれは認識している。そしてまた、われわれの共通の敵は、かれらの利益のためにだけ統治し、人民に敵対するために（過去においてしたように）、統治者同志お互いに結びつくものである。

支配階級が、国際警察、軍事および経済機構（インターポール、ＮＡＴＯ、共同市場）をつうじて共通の利益を承認し合うことが必要であると認識するように、あらゆる地域の一般大衆と結びつける関係――平和・自由・よりよき未来への願望――は、われわれにとって、国際連帯および組織への基礎となるであろう。

アナキズム　四号　〈予　告〉

地域合同労働組合の可能性を探る〈富士地区の場合〉
ある朝鮮人アナキストの伝記・金宗鎮伝（2）　Ｐ・グッドマン
アナキズムについて　外国のアナキズトグループ　南米・イギリス
戦後アナキズム運動史年表（三）　運動史研究会
資料・クロンシュタット・イズベスチァ
（六月下旬発行予定）

定期購読者　募集中！
月刊『リベーロ』　Ｂ五版十二頁
購読料　年間六〇〇円
京都市左京区田中門前町二八の五　リベーロ社